屋内.　レストラン　ニューヨーク – ２８日目

運ばれてくるウォッカグラスをカメラがフォローして来る。グラスはダンカンの前に置かれる。キャメロンは美しい、好戦的な１９歳。テーブルの反対から眉を上げて呆れた表情。

キャメロン
(彼のドリンクに対して)
それ三杯目よ。

ダンカン
数えてるなんて知らなかったよ。

キャメロン
(皮肉っぽく)
娘に会うためにベロベロに
ならなきゃいけないなんて知らなかった。

ダンカン
君も一度会ってみなよ。君もそうするだろうよ。

キャメロンは苦笑する。

キャメロン
あのさ、リゾットは美味しかったけど、 ダンカン,
何度も言うけど、私は学校には戻らないわよ。
だって、あなたの人生は学位なんて
なくても上手く行ったじゃない。少なくとも
仕事の上では。

ダンカン
お父さんだ。いいか。お父さんと呼んでくれ。

キャメロン
お父さんは私を８歳の頃から育ててくれて、
去年心臓発作で死んだ人よ。
あなたは生物学的な人。ダンカン。それだけ。
(間。少し柔らかくなって)
私のこと心配しなくていいよ。いい？
頭も良いし、ちゃんとミーティングだってできる。
良い仕事探すわよ。

ダンカン
本当に？特権意識が過剰で、口だけ達者な
１９歳の就職状況はどんな感じだ？

キャメロンは立ち上がり、荷物を纏め始める。 ダンカンは自分がエサに引っかかってしまった事に落胆している様子。

キャメロン
楽しかったわ、ダンカン。私がこうして
会わない理由を思い出すのに時間はかからないわね。

ダンカン
何？俺をＤＮＡに矮小化するがいい。
君に少しでも口を開く事も出来ない。
(間)
いいか、座りなさい。君が私の事をどう思おうと
勝手だ。でも私は君の父親なんだよ。

キャメロン
いいわ。父親のフリをしたいわけね。
じゃあ、ちゃんとやってみなさいよ。
証明して。

ダンカン
どうやって？

キャメロン
仕事ちょうだい。